

池袋学と自由の発信

——池袋周辺地域の文化土壌——

渡辺憲司

近代以前の武蔵野台地における池袋のイメージを考えながら、江戸時代における寺院文化・園芸文化、明治に至って開化される池袋周辺の郊外文化、さらに、個性的な教育方針を貫いた、帝国小学校・児童の村小学校・家庭学校・滝野川学園・成蹊学園などや、自由主義を標榜する、自由学園・立教大学・明治女学校などの学校群が集結するこの地域の教育風土について概観しながら、「池袋学」の可能性について考える。

■はじめに

立教大学の校歌「栄光の立教」、みなさんはきちんと歌えますか？ いつも不思議に思っていたのですが、他の学校の校歌は、なぜかよく聞こえるんです。立教の校歌は「見よ見よ立教」で終わるかなと思うと、最後に「自由の学府」が来て終わる。ところが、早稲田大学や慶応大学、明治大学をはじめ、他の学校の校歌は、学校名で締めくくられる場合が圧倒的に多いんですよ。たと

えば「見よ見よ立教、わが立教」という終わり方だったら落ち着くものを、あたかもとってつけたように「見よ見よ立教、自由の学府」と終わるんです。

実はこれ、それまでの歌詞の文脈とはほとんど関係ないんですね。もちろん、立教の教育が自由を理念として、キリスト教に基づいたものであることは、繰り返し言われています。しかし、野球の試合などで他の学校の校歌を聞きたびに、どうして立教大学は最後に「自由の学府」をつけたのかと、不思議に思っています。そのことをじっくり考えてみよう、と思ったのがきっかけです。最後に「そうか、それでつけたのか」と、皆さんに納得していただきたいと考えています。

■明治から昭和にかけての池袋周辺地域

まずは地図を見ながら、明治から昭和にかけての池袋の様相を追いかけてみましょう。

明治四十二年（一九〇九）、池袋には、畑以外ほとんど何もあり

ませんでした(左図)。大正五年(一九一六)になると、西武鉄道が開通します。また、豊島師範学校や立教大学校地ができますが、その他にはまだ何もありませんでした。しかし大正五年(一九二二)には、住宅地が続々とできていきます。そして、昭和七年(一九三二)になると地図に「立教大学」と明示されるようになり、住宅地もさらに増えてきます。昭和十二年(一九三七)には、さらに住宅地が増え、道路も整備され、立教通りもできます。日本聖公会神学校や工場もできてきます。



このように、明治末期から昭和初期にかけて、池袋は徐々に発展していきました。そこで、昭和二十年(一九四五)に着目したいと思います(下図)。昭和二十年の戦災で全て焼けてしまいました。豊島区の小学校と中学校は、空襲で焼けただために、同じ日に全て閉校になりました。

そこから十二年経って、昭和三十二年(一九五七)になると、住宅地も増えて、戦災から復興してきた様子がわかります。これはもう、我々の時代に近いわけですね。

■大正自由教育・立教大学・自由学園

今日は、自由教育をテーマに、その背後にある状況などについて、当時の文学作品や僕独自の年表を辿りながら話すつもりですが、講演のための調査にあたって、豊島区立郷土資料館の横山恵美さんによる自由教育のカタログや、以前、立教大学の教育学科にいらした中野光先生のお仕事から大きな学恩を受けました。そのことを感謝申し上げます。

『国史大辞典』の「大正自由教育」「立教大学」「自由学園」の項目から、池袋周辺地域における「自由」について見ていきます。

す。何がその土壌となったのか。そうした土壌を、立教大学の校歌が「自由の学府」で締めくくられることになった背景として捉えることができるのではないかと思います。

文献として『国史大辞典』を選んだのは「大正自由教育」と「立教大学」の項目を、浜田陽太郎先生が執筆しているからです。浜田先生は、今から四代前の立教大学の総長です。ですから、私が立教へ赴任した当初は、浜



田先生が総長でした。

まずは『国史大辞典』から「大正自由教育」を引いてみます。

大正期（必ずしも厳密に時期を特定できない）において、それまでの画一的な注入教授、権力的なとりしまりを特徴とする訓練に対して、子どもの自発性・個性を尊重しようとした自由主義的な教育。このような教育に対する呼称は一定しておらず、「大正新教育」ともいわれ、また、この立場からの教育改造が一つの運動として展開されたことから、しばしば大正自由教育⇨新教育運動とも呼ばれる。この教育の具体的支持基盤は、第一次世界大戦前後に至ってようやく一定の社会的階層を形成するに至った小市民の中間層と、二十世紀に入って世界的な教育思潮となった児童解放の動きである。

ポイントは、この運動が「小市民の中間層」——富裕層までではなくとも、社会階層的に中間ぐらいの我々みたいな人たちを中心としていたということです。それから、この運動が世界的な教育の思潮の流れであったということです。

今回取り上げるのが、「立教大学」と「自由学園」です。『国史大辞典』には、いかなることが立教について書いてあるかを、まず見ていききたいと思います。

アメリカ聖公会の宣教師、ウィリアムズ Channing Moore

Williams 主教によって、東京築地居留地外新栄町五丁目（中央区）に創設した立教学校が、その濫觴である。のちの総理

タッカーによれば「立教はセントポールスの日本名である。それは『教への建設』を意味し、キリスト教学校に極めて適わしい名である」としている。同十六年立教学校廃校、立教大学校として発足、四十年専門学校令による「大学」となり、大正十一年（一九二二）大学令による大学の認可を受け現在に至る。その間、大正七年（一九一八）、築地から現在の池袋校地へ移転。「中略」キリスト教に基づく教育を基本とし、寛容を旨とし、自由の学府としての伝統を継承する大学として、愛の魂、正義の心を持つ学生の教育を目標としている。

「寛容」という言葉が使われているのは、たいへん浜田先生らしいと思います。多くのものを受け入れるということですね。これが何より立教の良いところですよ。「愛の魂、正義の心を持つ」というのも重要ですが、「寛容」が一つのキーワードになってきます。それから、もちろん「自由」もキーワードになる。続けて「自由学園」の項目です。

それは、高等女学校令によらない、「もつと窮屈でなく自由にある学問をさせ、且つ進歩した意味に於ての家庭の実務が、その手とその頭で、ずんずん明快に運んで行けるやうな修業をさせる」ことを目的とした、「自由学園女学校」であった。つづいて女子部に高等科を増設、さらに初等部を開校していったが、のちに男子部（昭和九年（一九三四））、幼児生活団（同十四年）を加えた。この間、昭和九年（一九三四）に同北多摩郡久留米村（東久留米市学園町）に移転。

第二次世界大戦後は、男子最高学部・女子最高学部を開設した。これらは、いずれも大学卒業資格を与えられないユニークな高等教育機関として知られているものである。この学園の教育理念は自由主義教育思想に基づく自治・自由を本流としながら、広い社会的問題意識を開かせることであつた。

(久保義三執筆)

自由学園は、羽仁もと子と羽仁吉一が雑司が谷に建てた学校です。羽仁もと子は、明治女学校の出身者です。また、羽仁もと子と羽仁吉一は、婦人之友社を創設しました。雑誌『婦人之友』の前身である『家庭之友』を創刊するなど、自由教育だけでなく女性教育にも尽力した人物でした。

■郊外の安定した環境

ここまでの話をふまえて、今日のテーマである、池袋周辺地域の文化土壌と〈自由〉について、時代背景とともに考えていきたいと思います。

明治維新によって、江戸の人口は急激に減少します。明治維新で日本中のすべてが盛り上がったわけではない。それまで参勤交代で江戸へ来ていた男たちが、みんな帰ってしまったわけですから、江戸はがらになつてしまいました。幕末に百四十万人くらいだった人口が明治維新で七十万人になり、そして、明治という時代を経て、だんだん急激に回復していき、大正初期には二百万人を超える。さらに昭和になつてくると、三百万人を超して四百万人……と、東京はものすごい勢いで人口を膨張させていきま

すが、明治時代の初期には、都市の空洞化という状況があつたということを確認しておきたいと思えます。

その一方で、郊外はいかなる状況か。よく「池袋は何にもないところだったよ」と言われますが、それは都市部で急激な変化があつても、郊外では安定的な農村部の成立があつて、安定した人口構成をしていたということなんです。巢鴨のあたり、それから「鼠山」。「不寝」と書いて「寝ずの番をした」という意味らしいですが、現在の目白の森です。野鳥も来る大変いいところですが、それが薬草の宝庫として保存されています。駒込のナスや大根、きのこなどの農産物が神田市場にどんどん送られていきました。「安定的農村部の成立」とは私の言葉ですが、安定した農作物の供給地としての池袋、その周辺地域の雑司が谷や巢鴨があつたということです。

さらに植木屋。植木屋があるということは、屋敷がどんどんできてくるということですから、住宅地としては最高ですよ。園芸には、そういう側面も見なければいけない。そうした良い環境が構成されていたということも考えなければならぬだろうと思つておきます。

それから、学習院から目白通りのあたりには感応寺という二万八千六百坪の大きなお寺がありました。立教大学が一万四千坪くらいで、吉原は約二万坪ですから非常に大規模なお寺です。この感応寺は天保の改革で潰されます。感応寺のことを知らない人も多いのですが、豊島を語るとき、感応寺を抜きに語れません。

そこでもう一つ言いたいことは、感応寺のような大きな寺域を持つためには土地を買収しなければならぬということです。そ

うした大規模な土地、それも江戸から離れた不便なところではなくて、江戸の中で、ある程度気軽に行ける距離の土地の買収が地主などの協力によって可能であった。また、こうした大きな寺域が、江戸から近い範囲にあったことを考えると、この町のイメージを広げることができるだろうと思います。

それから、明治半ばの話ですが、明治二十一年頃、日本中を挙げて「牛乳さえ飲んでいれば元気になる！」みたいな風潮がありました。この頃、豊島区には三十箇所も牧場がありまして、豊島区南大塚の東福寺というお寺に、疫牛供養塔があります。牧場が点々としているところにも、着目していただきたい。それが明治の末年ぐらゐまで続くわけです。

■都市の劣悪化と郊都市への憧憬

やがて東京の中心地域では、急激に人口が回復していくのですが、それに伴って環境が非常に劣悪になります。今みたいに水洗便所なんかありませんから、人が増えたことで汚くなっていくわけです。そして、工場も、東京の中心部につくる状況が続き、それをとかく外へ出そうと言いつけられます。

そのトップを切ったのは、森鷗外です。陸軍軍医であった森鷗外は、ある種の文明的な影響を受けながら、都市の劣悪化を指摘して、公衆衛生の必要性を説くわけです。

それと同時に、イギリスのハワードの『田園都市論』が明治三十一年頃に入ってきます。イギリスも日本と同じで、都市中心部に集中して環境が劣悪化していきますから、郊外都市をつくろうとするんです。ミステリー映画などを見ますとわかりますが、イ

ギリスも郊外はなかなか良い。そういうところから、田園都市への憧憬が出てくるわけです。

そうすると、片山潜が『鉄道新論』（明治二十九年）で言っているように、都市交通の整備が必要になってくる。（都市）を中心に据えて考える人が多い中で「郊外は郊外として自立すべきだ」と言ったのが、国木田独歩の「武蔵野」や「散歩論」です。「自立的郊外論」と言っていいでしよう。それから、都市部の劣悪化に対して、明治二十二年から大正六年（一九一七）に完成予定の「東京市区改正計画」——東京都を全部改革しようという計画——が公にもプログラミングされていきます。そうしたひとつの状況があったわけです。

その例として、幸徳秋水が明治四十一年（一九〇八）に書いた記事を紹介します。幸徳秋水は大逆事件で絞首刑になった人物ですが、大石誠之助と共に、今は冤罪だとはつきり言われていますので、危険な犯罪者などと、誤解のないようしていただきたいと思えます。

さて、幸徳秋水の「郊外生活」に、こう書かれています。

京に田舎あり、コスモスける大塚停車場を半丁、仙溪園の楓林に隣りて、我は此程一屋を賃しぬ、軒傾き柱朽ちて、見るかげもなき破屋ながら、室の数は、五、賃は七両二分、廉ならずとせず。若し夫れ秋高く気澄めるの日、苗木畑隔てし牧場には五六の乳牛ゆるやかに眠り、荒れたる庭の横手には、夫婦の農夫清水に蹲んで、白玉の如き蕪を洗ふ、飾らぬ野趣はおのづから其中に在り。「中略」遮漠、今の我が郊外

生活は、平穩なり、閑静なり、古雅なり、質朴なり、文明を知らず、流行を趁はざる郊外生活なり、我は我が清福を欣ぶ。

「京」は東京のことです。東京の大塚停車場から半丁のところに一軒のあばら家を借りたと。「賃は七両二分」とはどういうことか。明治は「円」なんです、たとえば「今日品川に遊びに行こう。一両持っていけば大丈夫だろう」なんて言ったりするんですよ。つまり、ここで言う一両は、一円のことです。だから「七両二分」は、だいたい七円二十銭くらいになります。当時の小学校の先生の初任給が八円ですから、だいたい小学校の先生の初任給程度。今の小学校の先生の初任給は、差があるでしょうけれどもだいたい十七万円くらいでしょうか。だから「七両二分」は、

だいたい十五〜六万円くらいです。これを「廉ならずとせず」、つまり「安くはないわけではない」と言っている。

幸徳秋水と聞くと、「貧乏人だったのではないか」とか、ふと思うんですが、そんなことはありません。彼は非常に良い家の出身なんです。仲間たちも、貧しい人もいますが、基本的には裕福な人たちです。とくに大石誠之助は、たいへん裕福でした。あとで触れますが、文化学

院をつくった西村伊作などもそうした富裕層の人達です。だから家賃が十五〜六万の家を借りられるわけです。

幸徳秋水はここでの生活を「平穩なり、閑静なり、古雅なり、質朴なり、文明を知らず、流行をおわざる郊外生活なり、我は我が清福をよろこぶ」と語っています。あとでお話ししますが、この数年後に彼は大逆事件で検挙され、絞首刑になったのです。

次に引いたのが、森田草平の「煤煙」です。ご存知のように、森田草平が夏目漱石の紹介で朝日新聞に連載したものです。平塚らいてうとの心中未遂を話題にした作品です。

ニコライの円蓋が黒く浮出して見える。大都会は今が埋葬の間際かと思はれた。此寂かな夕暮の空に彼方此方工場の煙突から幾条となく煤煙が立つ。

これは「煤煙」のひとつのクライマックスというか、出会いの場面です。丸屋根が水道橋のあたりから向こうに見えてきて、大都会はもう死ぬ直前だと言っているわけです。それで工場の煙突から立つ煤煙を見た主人公、平塚らいてうがモデルの女性は「ああ、いい煙だわ」と言うんですね。やがて彼らの運命を暗示しているかのように「あのモクモクした煙を見るととてもいい気持ちなの」なんてことを言うんですよ。主人公の男が、それに対して「いや、そんなこともないよ」みたいなことを言って、デートするシーンです。勘所は、先ほどお話しした、都市の空洞化後に人口が爆発的に膨張した時期に工場の煙がモクモク立つということに、ある種の象徴を言っているわけです。



それから、平塚らいてうを中心とする女性たちの新しい動きです。雑誌『青鞥』の表紙は、新しい女性を象徴したような非常にモダンな感じでした。この時期、そうした新しいムードが盛り上がってくる。同じ頃、らいてうは、高村光太郎の妻で「東京には空がない」と言った智恵子とテニスをしたりして、雑司が谷あたりをぶらぶらしていた。要するに、小市民というか、ある種の富裕階級が成立していたわけです。

こうしたことをある種の土壤として、後に触れる滝乃川学園や家庭学校、明治女学校などができていくんです。

■池袋周辺地域と社会的弱者のための教育

続いて、農村部の発展による郊外文化の成立について見ていきましょう。このあたりから、僕が独自にまとめた明治大正期の年表をもとに、時代を追ってお話ししていきたいと思えます。

明治三十年に明治女学校が巣鴨に移転します。もちろん、地価の安いところに土地を買って、規模を大きくしたいという理由があったのでしようが、空気のいいところを選んで麹町から移転してくるわけです。

それから、家庭学校と滝乃川学園に注目したいと思います。家庭学校は、犯罪を犯した子どもを更生させる、感化院的なものです。家庭学校をつくった留岡幸助は、忘れてはならない人です。池袋に住んでいた人ですが、さらに北海道の紋別にも分校をつくります。子どもが罪を犯して学校をやめるとことは、たしかにその子に責任があるかもしれないけれども、環境など様々な問題を抱えるから、社会の中で弱者として追いやられた結果でもありま

す。僕は四十年近く教員生活を送っていますが、こういうことは、これから考えなければいけないことの一つだと思えます。大事なことは、明治三十年代頃、そういう人を収容する学校ができてきたということなんです。

滝乃川学園は、知的障害を持つ方の施設ですね。『筆子・その愛——天使のピアノ——』や『無名の人——石井筆子の生涯』といった映画にもなりましたし、平成四年（一九九二）には天皇皇后両陛下が来訪されました。今は立川の方に移っていますが、滝乃川学園の石井亮一さんは立教の出身者で、立教女学院の教頭だった方です。宗教色はほとんどありませんが、聖三一礼拝堂や石井亮一・筆子記念館は重要文化財にも指定されているところです。

この時期について申し上げたいことは、もちろん池袋駅が開通して便利になったことも重要ですが、社会のなかで大きな弱者になった人たちの学校が池袋周辺地域に続々とできくるといいうことです。そうしたことに思いを寄せると、この時代がどういう方向に向かっていたのかを考えられると思うんです。

明治三十四年には、日本女子大学校が開校します。平塚らいてうなんかが入っていくわけですが、成瀬仁蔵さんが新しい女子教育を始めていく。これは、明治女学校も同じことです。そして、明治女学校の出身者である羽仁もと子は自由学園をつくっていくわけです。また明治女学校では島崎藤村が教えていましたよね。このように、女性、いわば当時の男子強権社会において、時代の波に翻弄されながら隅に追いやられようとする人たちが引き上げるといふ動きが起こっていました。

池袋の状況で言えば、野上豊一郎と弥生子が西巣鴨に移転して

新居を構えます。彼らも富裕階級の人間です。明治四十一年に大塚に移転してきた幸徳秋水もそうです。要するに、ある種の富裕階級の人間が巢鴨や大塚といった池袋周辺地域に移転してくるんです。一方で明治女学校が廃校になり、豊島師範学校が明治四十二年（一九〇九）につくられます。

同じく明治四十二年に、立教学院は、東京府北豊島郡西巢鴨村大字池袋に、新キャンパスの用地として一万一千坪を購入しました。明治四十五年（一九一〇）には成蹊実務学校（現・成蹊学園）ができる。これらのことが、明治四十三年（一九一〇）の大逆事件を挟んで成立しているわけです。評論家の柄谷行人は大逆事件の遺産で大正デモクラシーが起きたとも言っています。大逆事件で最も印象深いのは、徳富蘆花の一高での演説です。当時の校長は新渡戸稲造でした。誰もが「こんなことを言っているのだろうか」と言った演説です。その一節を少しだけ引用したいと思います。

諸君、最上の帽子は頭にのつてゐることを忘るる様な帽子である。最上の政府は存在を忘れらるる様な政府である。帽子は上にいるつもりであまり頭を押つけてはいけぬ。我らの政府は重いか軽いか分らぬが、幸徳君らの頭にひどく重く感ぜられて、とうとう彼らは無政府主義者になってしまつた。無政府主義が何が恐い？ それほど無政府主義が恐いなら、事のいまだ大ならぬ内に、下僚ではいけぬ、総理大臣なり内務大臣なり自ら幸徳と会見して、膝詰の懇談すればいいではないか。しかし当局者はそのような不識庵流をやるにはあまりに武田式家康式で、かつあまりに高慢である。得意の章魚

のように長い手足で、じいとからんで彼らをしめつける。彼らは今や堪えかねて鼠は虎に変じた。彼らの或者はもはや最後の手段に訴える外はないと覚悟して、幽霊のような企てがふらふらと浮いて来た。短気はわるかった。ヤケがいけなかつた。今一足の辛抱が足らなかつた。しかし誰が彼らをヤケにならしめたか。「中略」出家僧侶、宗教家などには、一人位は逆徒の命乞する者があつて宜いではないか。しかるに管下の末寺から逆徒が出たといつては、大狼狽で破門したり僧籍を剥いだり、恐れ入り奉るとは上書しても、御慈悲と一句書いたものがないとは、何という情ないことか。「中略」十二名——諸君、今一人、土佐で亡くなつた多分自殺した幸徳の母君あるを忘れてはならぬ。「中略」天皇陛下は剛健質実、実に日本男児の標本たる御方である。……もし陛下の御身近く忠義の臣があつて、陛下の赤子に差異はない、なにとぞ二十四名の者ども、罪の浅きも深きも一同に御宥し下されて、反省改悟の機会を御与え下されかしと、身を以て懇願する者があつたならば、陛下も御領きになつて、我らは十二名の革命家の墓を建てずに済すんだであらう。

（徳富蘆花「謀反論」）

この演説を認めた新渡戸稲造も校長として偉いと思ひますが、こういう演説をできる土壤が一高にあつた。つまり、大逆事件という大きな犠牲者を出した事件には、一方では、こういう背景もあつたわけです。これは、我々が今日の「自由の学府」を考える時に忘れてはならない、ひとつのエポックだと思ひます。

もうひとつだけ言いたいのは、ソローの『ウォールデン―森の生活』についてです。コンコードのウォールデンは環境を学ぶ者にとっては重要な土地です。コンコードは、ボストンから電車で四十分くらいのところにある小さな町なのですが、エマーソンという哲学者が中心にいて、オルコットなどの哲学者をここへ集める。日本の場合と同じで、都市部であるボストンの環境が劣悪化したために、郊外のコンコードに移るわけです。ウォールデンというのは、その小さな池です。『ウォールデン―森の生活』は環境学を研究している人にとってはバイブルですが、これが明治四十四年に日本で初めて翻訳された。このように、都市部が劣悪化する一方で、環境のことを深く考える人たちがいたのです。

■池袋周辺地域と児童文学

さらに、大正期の状況を見ていきましょう。

大正元年（一九一〇）に小学校令が改正されます。野上弥生子が大正二年（一九一三）に出生して、「この赤ちゃんをいい環境で育てあげたい」という、「新しき命へ」という短編を書きます。また有島武郎が「小さき者へ」（大正七年）で、汚い都心ではなく、自分の子どもや孫にきれいな空気を吸わせてやりたいということを書くのもこの時代です。

大正三年（一九一四）には、羽仁もと子が自宅を婦人之友社にして『子供の友』を創刊します。ライバルは、講談社の『少年倶楽部』です。このように子どものための雑誌がつけられ始めます。また成蹊中学校が開校し、東上鉄道が開業して、ますます便利な状況が生まれてくるのも大正三年です。すでに医業を離れていた

森鷗外の「大塩平八郎」や夏目漱石の「こゝろ」が発表され、自由教育の成立を背景に、修身教育が批判され始めるのもこの大正三年頃の特徴です。一方、第一次世界大戦では、日本は対独参戦します。日本は、第二次大戦ではドイツと共闘するわけですが、この当時はドイツ嫌いです。

島村抱月の芸術座がトルストイの『復活』を上演し、松井須磨子が歌った劇中歌「カチューシャの唄」が流行します。日本はロシアに勝ったあと、ロシア文学に惹かれていった時代があるわけです。大正四年（一九一五）には「ゴンドラの唄」とか「恋はやさし野辺の花よ」といった唄が流行する。白蓮の『踏絵』という歌集が刊行されたのもこの時代です。

それから、雑誌に発表されたのもっと早い時期ですが、芥川龍之介の「羅生門」が大正四年に刊行されます。「舞姫」と「羅生門」は高校の国語の教科書の定番です。これは問題があると思うのですが、ここではふれません。現在も、実に多くの学校で「羅生門」は読まれています。「羅生門」が発表され、「ヒューマンとは何か」とか「人間の開示とは何か」といったことが問われ出したのも、この時代だと思います。

■池袋と周辺地域をめぐる新たな動き

大正五年（一九一六）で重要なことは、せっかく明治の時に憲法をつくり、議会に重きを置くことになったのに、議会が無視されていく傾向が見えてくることです。それに対する「非立憲主義批判」がありました。その先頭に立った吉野作造が『中央公論』に「憲政の本義を説いて其の有終の美を済すの途を論ず」という文

章を発表します。池袋学を考える上で忘れてはならない人ですが、先般お亡くなりになった、雑誌『東京人』の最初の編集長である粕谷一希先生が重視しているのが、この吉野作造の政論ですね。そして、チャップリンの映画が上映されて、文明批判するものこの頃です。

それから、倉田百三の「出家とその弟子」（大正五年）に見られるように、新しい女性像や新しい恋愛像が生まれてきます。また黄興が没したのもこの大正五年です。黄興は、いわゆる中国革命の孫文の前のリーダーです。そして日本に來た黄興をバックアップしたのが宮崎滔天で、中国の革命のリーダーの一人でした。滔天の息子である宮崎龍介と白蓮が結婚して、雑司が谷に住むことになります。

大正六年（一九一七）に澤柳政太郎によって成城小学校が創設されます。澤柳は後の大正大学の学長でもあります。京都大学学長だった頃、学部自治に反対して京大事件を起こしました。その後、私学を奨励するようになった澤柳は成城小学校をつくり、新しい女性教育を始めます。

この頃には「コロツケの唄」が流行しますが、この歌の流行は西洋料理が浸透してきたことの特徴でもあります。新国劇などが結成され、有島武郎の「小さき者へ」が発表される。さらに、日本にも多大影響を与えるロシア革命が起き、世界は民衆中心へと大きく変わっていきます。そうした時代状況下、大正七年（一九一八）に、立教大学の図書館が竣工します。これが、大きなところですね。

七月に鈴木三重吉らが『赤い鳥』を創刊しますが、これも池袋

の土壌から刊行されるわけです。『赤い鳥』は、ロマンティズムを具現化した、非常に新しいムードを持っていましたが、当時登場する宮沢賢治の童話も詩も一切入れていません。そのことに対して『赤い鳥』はブルジョワジーのためのものだったのではないかと批判する人もいます。しかし一方で『赤い鳥』が果たした役割というのは非常に大きいわけです。北原白秋とか、そういう人たちがいるわけですから。

その年の九月に、立教大学が築地から移転してきます。十一月には武者小路実篤が宮崎県に「新しき村」をつくるなど、次々に新しい動きが起こっていく。また、この年の末、第一次世界大戦の終結により、ようやく世界に平和が訪れます。しかし、翌年の大正八年（一九一九）に労働争議が起こり、地価が著しく高騰します。だから、労働争議の前と後では地価が全く異なります。また大正八年の一月には、前年十一月に亡くなった島村抱月のあとを追って、松井須磨子が自殺しています。

大正九年（一九二〇）には立教大学が私立大学に昇格しました。また同年にミドリヤ書店が池袋の西口駅前が開業しています。花岡謙二は「池袋モンパルナスの父」と言われる方です。この頃、池袋で生み出された『赤い鳥』は三万部を刊行します。カルピスが生まれたのもこの頃ですね。あのカルピスのマークは、まさに大正ロマンを象徴しているわけです。

■富裕階級による新たな教育

大正九年に、滝乃川学園が火災に遭います。火災に遭ったために子どもたちが犠牲になり、滝乃川学園を潰してしまおうという

意見が出るんです。強者を育てるための教育を背景に、知的障害者の方を対象とする教育が無駄だという意見も出てきます。しかし、皇室がこれを精力的に援助します。時の皇后の「ぜひ残すべきだ」という主張があり、滝乃川学園は再興し、現在に至るわけです。滝乃川学園に関しては、聖三一礼拝堂を寄付するなど、マキム主教も援助に乗り出しました。こういうことを立教はしっかりと考えていくべきだと思います。

大正十年（一九二一）、雑誌『芸術自由教育』の発刊などを背景に自由学園が開校しました。冒頭で自由学園についてふれましたが、羽仁もと子らの新しい教育が成立したのもこの年です。

それから、大逆事件で処刑された大石誠之助の甥、西村伊作の邸宅が和歌山の新宮にあります。この旧西村伊作邸もモダニズム建築です。西村伊作は、与謝野鉄幹や晶子を呼んで御茶ノ水に文化学院を創立します。文化学院と自由学園は、ある意味の双璧です。両方とも、日本の教育における種々の大きな主張——「自由」や「自主独立」といったことを述べているわけです。西村伊作は大富豪ですが、そうした富裕階級の人間が、自由の息吹を考へながら新たな教育風土をつくっていきました。一方で、白蓮が宮崎龍介のもとへ走ったのも、この年の十月です。それをどう捉えるべきなのかというところは置いておいて、やはり、時代背景を映し出した事件ではないかと思えます。

一方で、貧富の差が決定的に広がっていくのも、この時代の大きな特徴です。自殺者件数は六六七件にのぼり、同じ頃、玉の井の私娼窟などが膨れ上がっていきます。要するに、公娼——公の吉原が衰退する一方で、安易な性風俗の私娼が増加しくるのも、

この大正十年頃の特徴の一つです。日本で貧富の差が広がる中で、ロシア共産党の大会が開かれ、日本が革命後のロシアに惹かれていくのもこの時代です。

■「栄光の立教」成立

大正十一年（一九二二）、茨城県では、県知事・守屋源次郎によって、大正自由教育運動に政治的圧迫をかけます。一方、池袋では『コードモノクニ』の創刊、日本童話協会の設立がありました。そして自由学園の校舎が完成する。立教大学が、大学令による大学として認可されるのもこの年です。

僕がかつて勤めていた武蔵高校が設立されたのも大正十一年です。「自ら学び、自ら考えよ」というのが武蔵高校の理想でありますが、「自学自習」と「自由」は対の思想です。「自主独立自由」なんです。だから、武蔵高校が開校して「自ら学び、自ら考えよ」と言ったのと時を同じくして、羽仁もと子による自由教育の成立や立教大学の認可などがあったのだと非常に納得しました。しかし、一方では自由を封じ込める内容の「かごの鳥」の歌も流行します。

大正十二年（一九二三）、本郷中学が巣鴨にできます。平凡社の社長であった下中弥三郎らが「教育の新世紀社」という「自由教育」を旗印にした団体を結成します。また、同年九月一日、関東大震災が起きます。関東大震災によって、大正期に培ってきた自由主義がそこでさらに大きな打撃を受けたことも事実ですが、いままでの古いものが崩壊して新しい文化ができてきた、という主張もあります。

さて、そこで、今日の主眼点である「栄光の立教」が作詞されるわけです。

芙蓉の高嶺を雲井に望み

紫匂える武蔵野原に

いかしくそばだつ我等が母校

見よ見よ立教 自由の学府

愛の魂正義の心

朝に夕べに鍛えつ錬りつ

邦家に捧ぐる我等が母校

見よ見よ立教 自由の学府

星経る幾年伝統うけつ

東西文化の粹美をこらし

栄光輝く我等が母校

見よ見よ立教 自由の学府

最初は「見よ見よ立教」で終わっていましたが、後から各説末尾に「自由の学府」を付け加えることになったのです。だから詩全体で見ると「自由の学府」は、なんだかとおつてつけたように感じられる。当然のことながら我々は、つくり手が「自由の学府」を付け加えた思いを考えなければなりません。そこが今日の眼目です。戦時中、この歌は歌唱を禁止されます。戦時中は「自由」ではないし、そもそも「自由」であってはいけないわけですから。

この頃、キリスト教連盟が成立して、ひとつの姿勢を見せていきます。

大正十二年に普通選挙法が可決され、孫文が広東で大元帥になり、中国革命は新たな展開を見せます。周恩来なども様々な形で参加し、大きくアジア全体が揺れ動いていくわけです。そうしたことが、中国へ出て行く、大陸へ出て行くという日本の動きにつながっていきます。こうした中国侵攻に対する批判がある一方で「一旦空洞化した都市で、人口が爆発的に増加したのだから、新たな土地を求めることも仕方がなかったのではないか」という見解もあります。

このように、多様な視点が交錯する中で、あらゆる物事が成立しているということが、今日の話の要点なんです。

■池袋周辺地域と自由教育

大正十三年（一九二四）に、池袋児童の村小学校という一学級六十人くらいの小さな学校ができます。それと同じ時にできたのが芦屋児童の村です。何が言いたいかというと、池袋のイメージは芦屋なんですね。池袋と高級住宅地である芦屋のイメージを重ね合わせることは難しいかもしれませんが、しかし私は、池袋と芦屋は共通した土壌を持っていたのだ、ということを言いたいんです。つまり、色々な意味で豊かな土地に児童の村をつくり、そこで自由教育をやる。児童の村小学校は小さい学校ですが、それこそ「自由」に、「主役は生徒だ」という方針を示す。それまでは考えられなかった学校が、野口援太郎らによって池袋につくられたことは、やはり象徴的な事実ですね。だから、大正十三年の児童の村

小学校創立もまた、立教大学校歌斉唱という時に重ねなければならぬことの一つだと思えます。

同年には、川井訓導事件が起こります。川井清一郎という先生が、当時の文部省の視学官が来た時に、指定された教科書を使わないで授業をしたんですね。「護持院原の敵討」という森鷗外の作品を扱ったんです。護持院というのは、今の気象庁のあたりにあったお寺です。感応寺と同様に大奥の支持を受けた寺で、江戸城に近いところに建てた。享保二年（一七一七）に焼失し、その跡地が護持院ヶ原と呼ばれました。気象庁のあたりの、今でも何だかさびしい鬱蒼としたところです。鷗外の「護持院原の敵討」は、そこで決闘するという話です。そうしたら、視察官が「ちゃんと指定の教科書を使い」と怒ったわけですよ。これが、川井訓導事件という非常に象徴的な一つの事件です。

大正十四年（一九二五）には、池袋児童の村小学校は、現在も池袋にある城西学園に吸収されます。そして、大正十五年（一九二六）には、立教大学のライフスナイダー主教が、いわゆる軍事教育が激しくなっていく時に「Pro Deo et Patria（神と国のために）」という言葉を残しているんです。そこには「国」をつけざるを得ない状況もあったのかもしれませんが、この背景として「自由の精神」というものが一方では残されていたのだということを考えなければいけません。

同じく大正十五年には、成蹊学園の創立を迎えて、仏教を理念とする大正大学ができて、平和運動に貢献していきます。それから立教中学池袋では自治組織をつくりました。「学校市会」といって、自治会が学校を全部収めるといって、今よりも厳密な自治組織

を求めたのです。これも、武蔵高校の「自ら考えよ」という考え方や自由学園が持っていた思想と同じ流れです。文化学院が持っていた思想もまた、立教が持っていた思想と重ね合わせる事ができると思います。もちろん、その後の方向性はそれぞれ多様ですが、どこかで重なり合うと思います。

ここまで、僕なりに大正という時代の見取り図を示してきましたが、こうしたことを背景に、立教の「自由」や、自由学園や文化学院の成立があるということを、我々は覚えておかなければならないと思うんです。

■大正期における多元的自由の成立

昭和二年（一九二七）に「日本童画協会」の結成や大多喜中学の手塚岸衛校長排斥事件などが起こり、昭和三年（一九二八）に手塚岸衛が自由が丘学園を創設します。また、昭和七年（一九三二）には羽仁もと子が、フランスのニースで開催された世界教育大会で新教育についての講演をします。このように、教育における新しい動きが起こる一方で、昭和三年に治安維持法（大正十四年制定）が改正されたことで、その後の、より激しく思想統制される時代がやってくるわけです。

昭和九年（一九三四）、児童の村『太陽の子供』が創刊されますが、自由学園は当時の南沢（現・東久留米）に移ってしまふ。建物自体は残るわけですが、これを一つの象徴的な移転だと考えることもできると思います。

昭和十一年（一九三六）には「児童の村」が解散し、『赤い鳥』が廃刊になります。『少年倶楽部』は売れていくのですが、大正

は完全に消え去りながら戦争へと向かい、戦時色一色の非常に暗い時代がやってくるわけです。

大正期は大正ロマンだけではありません。大正期においては物事が多元的に成立しているんです。そうしたことを背景に、色々なものが出てきました。ところが、昭和十年（一九三五）以降は一色になるんです。つまり色々なカラーがいいのか、一つのカラーがいいのか、その分かれ目が、大正というものを考える一つのキーワードではないかと思えます。



最後に写真を一枚見ていただいて終わりたいと思います。池袋本町の震災後の風景です（上写真）。何もありません。このように何も無いところからヤミ市が生まれ、池袋は、新たなイメージを形成していきます。もちろん悪いイメージもあるでしょうけれど、ヤミ市は必ずしも否定的に扱うべきことではありません。私は、明治大正にかけて池袋の活力が、ヤミ市というある種

「自由」を呼んだのではないか、と考えます。

私なりの大正の捉え方、それから立教大学の「自由」の意味や自由学園の「自由」について触れました。今日聞いてくださった方には、大正の多元的な自由の存在というものを是非考えていただきたいと思えます。

（注1） 拙稿「大学入学以前における文学教育——大震災後の「羅生門」

——」（『文学』岩波書店 二〇一四年九・十月）参照。

（わたなべけんじ 立教大学名誉教授、立教新座中学校・高等学校校長）